

親日文学作品の中の迎合と抵抗

——李光洙の日本語小説——

一 はじめに

日本の植民地支配の下で活躍し、現代では埋もれてしまった朝鮮の文学者に李光洙（一八九二―一九五〇）がいる。彼が平安道定州で生まれたのは、二年後に東学党の乱が起き、日清戦争へ続いていくという時代であった。このような時代に、十歳にしてコレラで両親を喪い孤児となった彼は親戚の家を転々とする生活の中で、東学に惹かれていく。更に定州にロシア軍が駐屯した際の住民への暴力や略奪を目の当たりにした彼は、民族意識に目覚めると同時に、日本軍に対して好意を抱き始めたらしい。

一九〇四年に日露戦争が始まり、東学の人々を集めて「進歩会」が結成された。李光洙もこれに参加し、この頃から日本語の勉強を始めた。彼が入った東学党はその頃、親日団体である一進会を内部に発足させた孫秉熙の代で、李光洙は書記として活躍していた。しかし、日本軍が東学の弾圧をはじめたので、ソウルに逃れ一進会系の学校で日

本語を教えるようになる。

やがて一九〇五年、彼の能力が認められ一進会派遣の留学生として日本に渡ることになった。この時彼は十三歳で、ちょうど乙巳保護条約締結の年であった。周囲の影響もあつて、彼は語学習得の傍ら次第に文学に傾倒していき、明治学院中学三年に編入学した後は、日本の近代作家の作品を耽読した。また、朝鮮国民の思想改造には文学が必要と考えるようになった彼は、この頃から小説を書き始め、同級生の山崎俊夫の影響もあり、一九〇九年には「白金学報」に日本語による小説『愛か』を発表した。ちなみにこの年は、安重根が伊藤博文を射殺した年である。

翌一九一〇年に明治学院を卒業し、帰国して教師となるが、同年の日本による韓国併合のニュースを鉄道の駅の貼り紙で知った際には、長時間号泣したと言われる。その後後に創氏改名（香山光郎）の第一号となり、この名で作品を発表するほどの親日文学者に変貌を遂げるのである。

李光洙が再び日本に留学するのは一九一五年である。早稲田大学予

全 円子

科に入学し、翌年には早稲田大学文学部哲学科に進んだ。この頃連載した『無情』で、後に朝鮮近代文学の父と言われる程、彼は文名を高めた。儒教批判をテーマにしたこの作品は、朝鮮において最初の本格的な小説であった^(注1)。その後、一九一九年の三・一独立運動前の二月に、李光洙は独立宣言を起草し、上海に亡命した。残った朝鮮青年独立団の留学生達が発表したのが『二・八独立宣言書』である。一方、李光洙は上海臨時政府樹立に参加して、『独立新聞』の編集長に就任した。ここで愛国啓蒙運動家の安昌浩と知り合い影響を受け、民族の独立のための精神革命を志すが、一九二一年に突然帰国するのである。

帰国後逮捕されたが、独立運動に関わった同志たちが投獄されているにもかかわらず、彼は不起訴で釈放されたため、朝鮮総督府との関係を疑われ、更に翌二二年に「民族改造論」を発表して物議をかもしこととなった。この評論の論旨は、朝鮮の植民地化はその民族性に因る結果で、独立するためには実力を養成すべきであるというものであった。この主張を実践するため修養同盟会を發起し、続いて一九二六年には修養同友会を発足させ、東亜日報の編集長に就任した後は数多くの作品を発表した。その後、一九三三年には朝鮮日報の副社長就任にまで至った。日本による植民地支配下にあった当時において、朝鮮人が出世するためには、朝鮮総督府との親密な関係が必須の条件であった。李光洙は親日派とも言える朝鮮の言論界で大きな影響力を持つとともに、その反面では民族主義運動を修養同友会で実践するという二面性を持っていたと考えられる。

しかし、軍国主義を推し進める日本軍部により、一九三七年の盧溝橋事件前の六月に、「実力養成」団体の修養同友会は弾圧を受け、関係者全員百数十名が逮捕された。李光洙は病気のために半年後に保釈されるが、翌三八年に彼の思想の支えとなっていた安昌浩が犠牲になり亡くなってしまふ。この事件後に李光洙の親日文学者としての行為が顕著になっていくのである。そして、一九四一年に修養同友会事件は全員無罪で結審する^(注2)。

一九四〇年に創氏改名が施行されると李光洙は率先して香山光郎を名乗り、日本語による小説『心相觸れてこそ』を手がけたけれども、この小説は未完に終わっている。そして、太平洋戦争が勃発すると、高麗大学の教授でもあった張独秀などの親日転向者と同様に、戦争推進や志願兵の応募を促進するための講演を行った。張独秀も早稲田大学への留学経験があつて『二・八独立宣言』に関わり、帰国後には『三・一独立運動』に参加し逮捕されるほどの民族主義の闘士であつた^(注3)。そのような彼らもこの時期には競うように日本の要請に応えようとしていた様子が窺える。更に、李光洙は四三年に日本語による小説『兵になれる』や『大東亜』を発表し、皇国臣民化を促した。

しかし、日本の敗色が色濃くなつた四四年に発表した日本語の小説『少女の告白』には、親日文学とは断定できないほど内地にいる同胞の苦悩を描いている。これ以後、李光洙は親日活动から退き、ソウル近郊で隠棲するが、一九四九年に反民族行為処罰法により逮捕される。投獄中に「私の告白」などの弁明書を書くなどし、病気のために保釈

されることとなった。そして、翌一九五〇年朝鮮戦争が勃発し、その最中に北朝鮮人民軍兵士に連行されたまま、李光洙の消息は不明となった。

戦争という時代に翻弄された李光洙の人生であった。彼は朝鮮近代文学においては第一人者でありながら、親日活動をしたために韓国の文壇で認められにくかった。しかし、最近では彼の文学を政治的活動と區別して再評価しようという動きもある。本稿ではあえて親日作品としての評価がある日本語小説を取り上げて作者の時局に対する迎合と抵抗の跡を探っていきたいと思う。

二 日本語小説

李光洙の日本語小説は未完の作品を含めて十一篇ある。本稿で扱う作品は五篇で、発表年代順に紹介すると、次の通りである。

- 1 『愛か』李寶鏡（『白金学報』一九〇九年）
- 2 『心相觸れてこそ』（一）～（五）李光洙（『緑旗』一九四〇年）
- 3 『兵になれる』香山光郎（『新太陽』一九四三年）
- 4 『大東亜』香山光郎（『緑旗』一九四三年）
- 5 『少女の告白』香山光郎（『新太陽』一九四四年）

以上の日本語作品について戦争という時代を背景におきながら、植民地統治国の言語によっていかに小説が執筆されたのかを、検討していきたい。

1 『愛か』

この作品は一九〇九年に明治学院に留学中同校の同窓会誌『白金学報』に韓国留学生李寶鏡の名前で発表した最初の作品である。十月二六日に安重根がハルビン駅で伊藤博文を射殺した後で、日韓併合前のものである。

主人公の文吉は十一歳の時に両親を失い学校教育を受けることができなかったが、心の中には野心を秘めていた。幸いにもある高官の援助があり日本へ留学し優秀な成績を修めるが、志を同じくする友を見つけることはできなかった。ある会で出会った日本少年操に魅了された彼は、帰国の前日に操を訪ねるが、会う勇気が出せず自ら死を選択する。そして、今まで抱いていた野心を顧みつつ、自死を止めてくれる存在のないことを淋しく思う。

主人公文吉は明治学院留学中の李光洙であると思われるが、東京に留学するチャンスは得たものの、自ら抱いていた身を立て名をあげるという『野心』の実現には程遠く、同志を得ることもできない不安が描かれている。また、日本人少年操は同級生の山崎俊夫がモデルで、彼の薦めで読んだ、トルストイの無抵抗主義に影響を受けた。また、次のようにこの作品は同性愛を描いたものとも読める。

彼は操に逢へば、帝王の席にでも出された様に顔も上げられぬ、口も利けぬ、極めて冷淡の風を装ふのが常である、彼は又此の理由をも知らぬ、唯本能的なのである、其れで彼は筆を口に代へた。

三日前に彼は指を切つて血書を送つた^{（注）}。

短篇『愛か』を、林鍾国氏は「同性愛」とはいうものの、今時のありふれたホモとは違う。盲目的、事大的な自己没却の対日傾斜がその内容である」^(註5)と述べられている。しかし、単なる対日傾斜であるならば、文吉は死を選択したであろうか。自殺は思春期の頃に見られる一途な行為であると思える。伊藤博文の死の直後に日本にいる留学生たちの立場は針の筵にすわる思いであつたらう。主人公の名前が日本名であつたり、出身国が文中に出てこないのはその表れである。どちらにもつくことのできない苦悩が、日本名や不明の国籍に表れているのではないだろうか。

李光洙が来日した当時、従来一体であつた東学と一進会は日本の干渉が強まる中、東学(天道教)は独立の道を一進会は協力の方向へと歩みを別にし、乙巳保護条約に至つたのである。この条約を受けて韓国の留学生たちは、闘つて死のうと言う者と、勉学を続けようと言う者に分かれたという。李光洙もこの時には死を覚悟したと言つている^(註6)。

我は大いなる理想を抱いて居た、此を遂げることが出来ずに死ぬのは實に残念だ、我死んだら老いたる祖父や幼い妹は如何に歎くであろう、併此の瞬間に於いて我が死を止めて呉れる者がなければ仕方がないのだ。今や死すると生きるとは全く我が力以外にあるのである。

文吉が最後に死を選択することは「事大的な自己没却の対日傾斜」ではなく、思春期の一途な思いの表れであり、それは操に対する純粋

な精神的な憧れであり、李光洙の「闘つて死のう」という愛国心からくる抵抗の方向性をも示していると考えられる。また、「今や死すると生きるとは全く我が力以外にあるのである」とあるように、自分以外の者に責任を委ねてもいるのである。つまり、彼自身も自分の精神のあり方に整理がつかず混沌とした状態であつたと考えられる。日本語で小説を書くという行為は、時代背景を考慮する限りに於いて容易ではなく、この頃より彼の日本語小説には、はっきりと自覚してはいないが迎合と抵抗との両面が入り混じりながら潜んでいるのである。

2 『心相觸れてこそ』(一) (五)

この作品は一九四〇年に朝鮮に在住する日本人の民間修養団体である「緑旗連盟」が発行する啓蒙誌「緑旗」に掲載された未完の小説である。三八年に精神的支えであつた安昌浩を亡くしてから、李光洙の親目的行為は顕著になり、翌三九年には朝鮮総督府と関わりのある「朝鮮文人協会」の初代会長に就任する。また、転向者による組織「時局対応全鮮思想報告連盟」(四一年に「大和塾」に改編)にも深く関わり、四〇年に率先して香山光郎を名乗り創始改名した^(註7)。連盟では「日本精神の把握」や「内鮮一体の強化」そして「思想の浄化」の必要性が強調され、その実践活動として神社参拝・勤勞奉仕・軍事慰問・国防献金・時局講演会開催などを行った。李光洙は文人協会の会長として講演に参加し、「緑旗」に小説を発表した。このような背景が作品にはあるのだが、なぜ未完に終わったのであろうか。

主人公は四人の青年男女で、不逞鮮人呼ばわりされている思想家金永準の息子忠植と娘石蘭、半島に住む日本人東陸軍大佐の息子武雄と娘の文江である。仁尋峰で遭難している東兄妹を医学部生の忠植が治療し妹の石蘭が看病することで、両家における対朝鮮人、対日本人意識が変化していく。武雄の父東陸軍大佐は「朝鮮人に戦争などできるものか。第一愛国心に欠けてゐるぢやないか。」と考えていたが、忠植の父金永準と出会い彼のような立派な思想家の心を得るべきだと思ふようになる。一方、四人の青年男女は互いに恋に落ちていく。やがて武雄が出征し、忠植も日本を祖国として忠義を尽くしたいと父に願ひ出て軍医として中支戦線に出征することになる。

両家の中で武雄の母菊子のみ朝鮮人を認めていなかったが、忠植が軍医として志願してからは態度が変わる。残された女性二人は朝鮮神社と京城神社で参拜し無事を祈るが、ともに特志看護婦として忠植が配属されている中支戦線の野戦病院に勤務することになった。そこへ、両眼がつぶれた重傷兵武雄が運ばれ、四人は再会を果たす。武雄と石蘭は仮結婚式を挙げ、支那語が堪能な石蘭は盲目の武雄の杖となり敵軍懐柔工作に乗り出して監禁される。二人の前途は多難に満ちているが幸せな心持であった。ここで作品は未完のまま終わっている。

作品の冒頭に「作者の言葉」がある。

この小さい、拙い物語が、内鮮一體の大業に塵程の貢献をでもな
し得るとすれば私の願は叶ふのです。(作者)^(註)

「内鮮一体の強化」と「日本精神の把握」そして「思想の浄化」の

ための作品であるが、ここではその中に見え隠れする抵抗の精神を探りたいと思う。主人公の忠植の父金永準は思想転向した李光洙の投影と思われる。白川春子氏は「この作品の掲載誌『緑旗』の性格を考え合わせれば、『日本の朝鮮統治に絶対反対といふ立場を死守』できなかった李光洙が金永準の口を借りて、内鮮一体論を植民地支配を正当化するための手段に終わらせまいと必死の抵抗の声をあげているようにも思われる。」^(註)と述べられているが、同感である。

だから、彼は日本の正しさも強さもよく知り抜いてゐる。また、朝鮮も結局日本の領土として朝鮮人は日本臣民として生きて行く運命にあることも能く知つてゐる。しからば彼は何故排日家と呼べられ、不逞鮮人と睨まれてゐるのか。それは他ではない。第一は民族的獨立に對する義理であつて、第二は、朝鮮人が永久に植民地の土着民として、賤しまれなければならないといふことに對する悲憤である。この二つの點が釋然としないために、金永準は日本の朝鮮統治に絶対反対といふ立場を死守して來たのであり、

この金永準の日本に對する態度こそ李光洙の抵抗の精神の表れである。この作品は青年男女の恋愛を軸に、内鮮一致と学徒出陣を若者に呼びかけ洗脳しようという意図が見えるが、実は父金永準こそ大きな力を持っている。戦況もあつたであろうが、長編小説でしかもクライマックスに達しながら未完で終わってしまったのは、この時代に日本人の朝鮮人に対する差別は甚だしく、お互いを理解するどころか結婚などありえないと考えた結果ではなからうか。恋愛をテーマに設定し、

若者の心を捉えようと話をすすめたが、「内鮮一体」など絶対に無理なことと思いき詰まったことは、作家としては誠実である。彼の意識は、一方ではとりあえずストーリーを設定したが、他方では「内鮮一体」のイデオロギーが虚偽であるという考えに傾斜しているのである。「長く書きつづけたがおかしい、これ以上書けない」と筆を止めたのは、作家としては誠実な作者のささやかな抵抗であると考えられる。

3 『兵になれる』

この作品は一九四三年、「新太陽」に香山光郎の名前で発表されたものである。この年の三月に徴兵制が公布され八月には施行、そして十月に学兵制が実施された。李光洙は朝鮮文人報告会の理事に就任し、学徒勧誘の講演を行っている。この作品は「皇国臣民化」「学徒動員」がテーマであるが、朝鮮人であるが故に過剰に適応しようとしていることが痛ましい。

主人公の「私」が十四年ぶりに金子大佐と再会することになり昔を振り返る。「私」がした徴兵論主張の講義を聴いた金子大佐が、朝鮮民衆が本当に徴兵令の施行を願っているかどうかを確認するため、「私」の家を訪問したことが二人の出会いであった。「私」は答として、六才の長男鳳一と四才の次男龍三を指した。二人は軍衣をまとい軍刀を握ったまま昼寝をしていたのだ。

その後、軍職から身を引いた金子は閣議で徴兵が決定したのを受け「私」の息子を思い出し、再会をする。そして、既に徴兵の適齢と

思われた長男は病の為に他界したことを知るのである。七才の鳳一は内地人ばかりの幼稚園に通っていたが、卒園一週間前のある日から、朝鮮人の自分だけが兵隊になれないことを知り登園拒否になってしまった。その数日後敗血症を起こし危篤状態に陥った鳳一は、幼稚園の小倉先生が面会に来た時に、既に昏睡状態にもかかわらず、「先生、朝鮮人は兵隊になれませんか。」^(五)と悲痛にも訊ねるのである。金子は死に際の様子を聞きながら、いつか朝鮮人も日本人と同じ天皇の赤子として一つになると言い、私と盃を交わす。私の心は亡き鳳一の憶い出で一杯になったが、死の悲しみばかりではなく、「兵になれる」ようになったことに確信をもって大声で叫んだ。

長男鳳一は一九三四年に敗血症で亡くなった李光洙の次男鳳根であろう。彼の死後、李光洙は悲しみのあまり宗教に救いを求めるようになる。徴兵励行の作品ではあるが愛息の死を題材とすることは、何とも痛ましく辛い小説である。しかし、兵隊にはなれないという絶望の中で、亡くなった自分の息子を題材にすることは、結果的には戦争に行かないことを選んでいたのである。生きている息子が「兵になれる」ことを描くことも可能であったはずだ。表向きは「徴兵励行」だが、故意的にアイロニカルに表現したのではなく、期せずして「内鮮一体」を裏切るような作品になっている。日本人以上の日本人になろうとしているが、過剰な適応がかえって抵抗の叫びとして聞こえる。

4 『大東亜』

この作品は一九四三年に「緑旗」に発表された作品である。皇民化政策期のスローガンは「内戦一体」などであったが、他に「大東亜共栄圏の中核的指導者論」があった。これは朝鮮総督府が「大東亜共栄圏において」朝鮮人の地位を日本人の次に置き、「大東亜共栄圏を指導する中核的な地位を与えるというものである。戦争遂行への協力、自発的な皇民化への努力を期待したものであった」^(註11)。

寛朱美は父の書齋を片付けながら五年前に帰国した支那人范于生を思い出した。朱美の父寛和夫は上海の東亜同文書院の教授であったが、支那事変の戦火が上海に及ぶことを恐れ、帰国し早稲田大学で東洋史を講じていた。范の父鶴鳴は寛教授の著書「周礼と支那の国民性」に心酔し、以後両家は親交を深める。そして、寛教授の帰国の際に息子范于生を託す。

寛宅に同居した于生は東京帝国大学で国文学と国史を聴講していたが、南京が陥落し蒋介石が重慶に避難するという国情に因り、次第に元気がなくなる。朱美はそのような彼を心配していたが、寛教授はアジア諸民族が今こそ真の礼の心に帰することが大切であると諭す。すると于生は、日本の真意を事実によって解る日が来たら、再び門下に入ると言い残し帰国する。その後、上海は環附されビルマや比島は独立した。五年の歳月が経ち、身も心も范于生に捧げても良いと思う朱美のもとに「アスゴゴージツクハンウセイ」^(註12)との電報が届く。

この作品は未完に終わった『心相觸れてこそ(一)〜(五)』の時代

よりも、大東亜共栄圏の地図に次々に日本の旗が塗られていくという戦況の中にあつたので完成されたと考えられる。恋愛の対象も朝鮮人ではなく中国人であつたので、筆が進んだのかもしれない。

范于生は自国の人の偽りや利己主義、事大主義や権謀術を憎み、反面日本人の正直さを羨んでいた。落ち込んでいた彼に寛教授が日本の皇国臣民思想について説くが、「范は、自分の祖國が、日本に比べて、あまりにみずばらしい状態にあるが故に、その祖國に對する愛國心が片意地になるのであつた。」と感じるのである。これは李光洙の内面の葛藤の表れであり、常に自国の弱点に目を向け近代化を図ろうとしても、それが統治国日本の支配の下でしか実現できない屈辱と、祖國に對して強まる愛國心の表れだと思ふ^(註13)。

5 『少女の告白』

この作品は一九四四年に「新太陽」に発表したもので、内地に住む朝鮮人の少女から「先生」に送られた手紙の形をとって自己を告白している。「先生」とは李光洙のことで、彼は実際に日本においても講演活動を行っていた。

主人公は十九才の通称新井信子という少女で、貧困の為に幼い頃、生地朝鮮を離れて両親と兄と一緒に内地に引越して来た。そのような事情から小学校しか出ていないのだが、故郷朝鮮を恋しく思うあまり作家や文学作品を通してでも、朝鮮の生活や伝統を知りたいと思うようになった。そんな時に京都大学にて先生の講演を聴くことがあつ

た。それは日本の国体や大東亜戦争の目的や正義性、帝国における朝鮮民衆の地位と進むべき道などに言及するものではあったが、更には朝鮮の祖先が高い文化や忠義心を持ちながらも、現在の同胞が不甲斐ない状況にあることを嘆く内容であった。これに共感した信子は「先生」に手紙を書き身の上を白状する。

信子の両親は一文なしで内地に來た為金銭の価値を一番高く評価し、娘には金持ちとの結婚を望んでおり、信子は文化程度の低い両親や同胞に対して、不甲斐なさを感じている。彼女には、小学校時代から親しくしている友達で、華族出身の有名歌人川村妙子がおり、親戚の谷村という銀行家を紹介してくれる。谷村は日本と朝鮮の古代からの関わりの深さを信子や妙子、そして谷村の息子克磨に教えた。いつしか信子は谷村克磨と恋仲になり結ばれるが、二人の幸せは続かず克磨は妙子と結婚してしまう。信子の両親は谷村家が自分たちを馬鹿にしたと憤慨する。信子は身を引き、同胞が天皇の御民として陸海軍に入れるのを知り、自分も嫁に行かずに勤労奉仕することを決意する。親も夫も友も全てを失った信子は、「お念佛は、わたくしのやうなもの唱へるものでございませうか。」^{〔音〕}と先生に問う。

戦争末期の作品で「皇国臣民化」や「学徒動員」奨励のためのものであるが、親日文学とは思えないほどである。未完の作品「心相觸れてこそ（一）（五）」と同じように若い男女が登場するが、日本人と朝鮮人の恋は結ばれるはずがない。とても現実的で、朝鮮人に対する差別や、内地に住む同胞の不甲斐なさなども的確に描写されている。

作者が日本を知っているからこそ書ける在日同胞の苦しい立場が良く表現されている。統治国日本に対する抵抗の精神を描きつつも、統治下にいる朝鮮民族の不甲斐なさを吐露し、作者李光洙自身の胸中を告白した作品である。

三 おわりに

李光洙の親日作品と考えられる日本語小説を取り上げてみたが、どの作品においても彼なりの抵抗が垣間見られた。表面的には親日的であっても、「内鮮一体」のイデオロギーに同調せず距離を置き、日本に同一化できない苦しさを表現している。彼の日本語小説は皇民化政策に密着も同調もしていない、むしろそれを裏切った形の作品になっている。時局に対して尻尾を振ったのではなく、距離を置いたのでないだろうか。

彼の代表作である『無情』は従来の儒教社会を批判したもので朝鮮近代文学の金字塔となった。しかし、その後親目的な行爲をしたことで彼の評価が下がったことは実に残念なことである。

李光洙の作品は、彼の人生と同様に常に自己反省の繰り返しであった。自分、あるいは自国の文化の弱点に目を向け、変化しようと試みた。朝鮮国民の思想改革の為に文学が必要と考え、執筆活動が続けたが、戦時下という時代に翻弄されながら書き続ける道は、決して容易ではなく、彼は宗教に救いを求めたこともある。それでも彼は困難

を克服しながら朝鮮の近代化を図ろうとしたのではなからうか。

李光洙の模索は典型的な植民地知識人の苦悩を象徴している。百パーセントの抵抗ではなく、かといって完全に尻尾を振ったわけでもない。彼のようなどちらにつきともできない苦境は、植民地下の一般的な人の立場を象徴していたと言えよう。また、現代において日本の文壇での在日作家の活躍は目覚しいが、李光洙の苦悩の表れとしての彼の小説は、在日文学にも通じるものがあるので、再検証の必要性を感じる。

植民地時代に書かれた日本語小説、つまり統治国の言語による作品を読み返し、再検討すべきである。

- 注1 上垣外憲一『日本留学と革命運動』東京大学出版会一九八二年
- 2 李光洙編『韓国の近現代文学』法政大学出版局二〇〇一年
 - 3 岡山ベンクラブ編『岡山人じゃが2』吉備人出版二〇〇五年
 - 4 大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九〇一）』一九三八創作篇1）緑蔭書房二〇〇四年
 - 5 林鍾国『親日派』御茶の水書房一九九二年
 - 6 上垣外憲一『日本留学と革命運動』東京大学出版会一九八二年
 - 7 林鍾国『親日文学論』高麗書林一九七六年
 - 8 大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九三九）』一九四五創作篇1）緑蔭書房二〇〇一年
 - 9 白川春子『李光洙の日本語小説について』年報朝鮮学第五号

九州大V一九九五年

- 10 大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九三九）』一九四五創作篇5）緑蔭書房二〇〇一年

- 11 歴史教育研究会編『日本と韓国の歴史共通教材をつくる視点』梨の木舎二〇〇三年

- 12 大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九三九）』一九四五創作篇5）緑蔭書房二〇〇一年

- 13 白川春子氏は「李光洙の日本語小説について」（年報朝鮮学第五号）九州大V一九九五年）の中で、既に指摘されている。「このような面の内面の心理を描くことで、作者は、日本の優位性を認めれば認めるほど愛国心は強まり、屈辱感が高まること、たとえ支配者、日本を理解したとしても被支配者の苦しみは全く解決されないこと、つまり親日の道を選んだ自らの内面の葛藤を暗に訴えているように思われるのである。」

- 14 大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集（一九三九）』一九四五創作篇5）緑蔭書房二〇〇一年

（ぜん かずこ／岡山商科大学 専任講師）